



喜多の楚

菅原伝授手習鑑の通し公演

大阪が世界に誇る「文楽」。その中でも義太夫狂言の最高傑作とされるのが、当宮のご祭神でもあります、天神さまこと菅原道真公をモデルに書かれた『菅原伝授手習鑑(すがわらでんじゅてならいかがみ)』です。

全五段、十八場面もある長い物語の為、だいたいが人気のある場面の上演なのですが、**今月五日から二十七日まで**、中央区の国立文楽劇場の開館三十周年記念として、実に十二年ぶりとなる、初段から五段までの通し公演が行われる事になりました。

公演時間実に約十時間という、とんでもない長さの為、十時からの午前の部と、十六時から午後の部の二部に分けて公演されますが、午後の方は、先般、ご自身の体調と、大阪市の大幅な補助金カットの為、引退を表明された人間国宝の七世竹本住大夫さんが出演される事が決定しており、引退公演にもなりません。更に同じく人間国宝の三味線方の鶴澤清治さん、人形方の吉田叢助さんもこの最後の公演に華を添えられる事になっており、大変豪華な公演となります。

文楽はユネスコが定める無形文化遺産にも登録されている大阪が世界に誇れる文化であり、その根幹の一つに天神さまの物語がある事を、恐らく多くのお大阪府民は知らないのではないのでしょうか。当宮とも関わりの深い白太夫も登場するなど、大阪の天神信仰の根幹を形作った物語です。ぜひこの機会にご鑑賞されてみては如何でしょうか。

凌雲閣 開園百二十五年

茶屋町にまだ菜の花畑があったであろう、明治二十二年(一八八九)。突如として九階建ての高楼、凌雲閣(りょううんかく)が茶屋町に聳えり立ちました。今からちょうど百二十五年前の四月五日の事です。

この明治のタワーは、檀重三氏という人の発起で整備された有楽園という歓楽地の中央にあったもので、高さ三十九メートルという、当時としては珍しい高層建築でした。

この凌雲閣が何の目的で建造されたのかという事は記録にありませんが、建造の四年前に、大阪駅まで沈んでしまったという淀川の大洪水が発生しており、凌雲閣の建築時は、水害に強い街へと、**大阪市街の一大整備**、すなわち近代化がすごい勢いで進められていた時代であり、凌雲閣は近代化の先駆ともいべきものだったのかもしれない。

それから百二十五年。明治の元勳、大隈重信曰く所の、「人間の生の区切り」とされる年月を経て、現代の茶屋町も、凌雲閣が建造された時代と同様に、今月五日には毎日放送の新社屋がグランドオープンを迎えるなど大きな生まれ変わりの転機を迎えているのかもしれない。

神社豆知識「注連柱」

神社の鳥居をくぐって、社殿までの間に、二本の石柱にしめ縄だけが掛けられているものをご覧になられた方もあられるかと思えます。これは「注連柱(しめばしら)」と呼ばれるもので、鳥居の原型の一つといわれるものです。

まだ注連柱については、あまり研究が進んでいませんので、その起源についてはよく分かっていませんが、大正時代から昭和初期にかけて全国的に設けられたものが多いようです。意味としては鳥居と同じく聖俗の結果であり、更に神域に近づくという事を示すものなのです。

(当宮御社の注連柱は落下の危険から現在はいしめ縄を取り外しております)

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀 知

